ヴァリアント・エクスペリメント

あやめゆう
Yu Ayame

立 ち 読 み 専 用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵　マニャ子

目　次

before the fight　7

ラウンド1／ハードパンチャー　11

ラウンド2／マリオネットファミリア　46

ラウンド3／テンタクルバインド　74

インターバル　103

ラウンド4／ボルトリッパー　119

ラウンド5／アクリエイトリリィ　158

インターバル　191

ラウンド6／ウルトラバイオレント　197

ラウンド7／サムライエッジ　241

ラウンド8／ハイドヴァイパー　281

ラウンド9／キルゾーン　326

after the fight　370

あとがき　392

ヴァリアント・エクスペリメント

before the fight

◇◇◇

人生とは長い暇潰しである、などという科白を最初に口から吐き出したのが誰かは知らないが、私が思うに、たぶんそいつは暇だったのだろう。

何故なら暇でない人間は暇について考えないからだ。忙しい人間が希う「手の空いた時間」の名は「休み」であり、働かざる者が所有する「手の空いた時間」の名こそが「退屈」であるからだ。

であれば、人生は暇潰しだなんだと言い出したのは古代ギリシャか、古代ローマあたりの哲学者に違いない。連中は奴隷に労働の一切を任せて昼間から酒でも呑みながら人生とは生命とは神とはなんぞやと考えていたし、そういうふうにしてしか本物の哲学は生まれない。そしてここは古代ギリシャではなく、私は本物の哲学者ではなかった。

現代日本の地方都市、御影市御影中央町の繁華街からやや外れた位置の公園だ。

ようするに、私は昼間から公園のベンチに座ってぼんやりと時間を過ごしているのだ。

住宅街からは外れているし遊具のない公園なので、昼間であっても子供がいない。私のような二十四歳の若者がベンチに座って空を仰いでいても通報される心配のない、具合のいい場所である。

どうして私のような若者が平日の昼間に公園のベンチに腰掛けているのかといえば、暇だからだ。哲学者でない私が手空きの時間に暇を感じているということは、仕事がないということである。

いや、職はある。

職はあるが仕事がない。はたして職も仕事もないのと一体どちらがましだろうか。

私はベンチに背中を預け、ぼんやりと天を仰ぎながら少し考えてみたが結論は出なかった。

そもそも今日は仕事の予定だったのだ。昨日の夜に準備もしていた。なのに朝六時半に現場監督の杉山から電話が来て、キャンセルになってしまった。元請けの上の方から視察が来るとかで、二次下請けの作業員を見られると拙いだかなんだか。おかげで平日の昼間から公園のベンチで暇潰しができるわけだ。人生のように。

「……」

手の空いた時間は、嫌いではない。

しかし手の空いてない時間の方も、私は嫌っていないのである。特にこうして唐突に手が空いてしまうと、何をしようか迷った挙げ句に昼間から公園のベンチにポジションを取ることになる。

まあ、これはこれで嫌ではないが。

そのようなことをつらつらと考えつつ、天から地へと視線を戻す。そこらに配置されているベンチで人生を過ごしている者は誰もいない。失業率は右肩上がりだというのに、職のない若者たちは一体何をしているのだろう。改めて周囲を眺めれば、どうやらこの公園には私しかいないようだった。

徒歩一分三十秒で繁華街の中央通りへ戻れるし、意識すれば近くを行き交う車の音も聞こえるというのに、この公園には私一人だけ。まるでスティーブン・キングの小説の主人公になったような気がして少し嬉しくなった。よく考えるとキングの小説は『シャイニング』しか読んでいないのだが。

それにしてもこうして木製のベンチに腰掛けながら日向ぼっこをしていると、古代ギリシャだか古代ローマだかの暇人よろしく哲学に耽りたくもなってくる。例えばインフレ傾向にしようとしていたはずがスタグフレーション化している現代日本と私個人の仕事のなさについて哲学してみよう。なんだかよく判らないようなことをなんだか判ったようなふうに言えば哲学っぽくなるはずだ。

「……ふむ」

よし、それでは試しにやってみよう。

――人間は考える莫迦である。

駄目だ、パクリのうえ駄洒落になってしまった。どうやら私に哲学の才能はないようだ。さらに言うなら冗談の才能にも欠けている。

が、まあいい。こういう無駄な時間も悪くない。哲学には失敗したが私は割に上機嫌だった。理由は簡単、私は考える莫迦だからだ。

ぽかぽかと日差しを浴びながら益体もない考え事をして時間を潰すのは気分がいい。明日も同じことをやれと言われれば拒否するが、それなら明日は公園のベンチに座らなければいいだけだ。

などと考えていると、きゅうと腹が鳴った。そういえば朝から何も食べていなかったのだ。私は居心地の好いベンチから腰を上げ、事務所に戻るか近くの喫茶店に行くかを考えた。中央通りから一本外れた路地にある喫茶店は、なかなか美味いホットサンドとコーヒーを提供してくれる。私は念のために財布の中身と来月の収入を計算し――、

と。

近くの植え込みの裏から、何か黒いモノが現れた。その黒いモノの動きはかなり速く、飛ぶ鳥が落とした影のように見えた。

が、その『黒』は私の足下で急停止し、訝る私にふたつの青い瞳を向け、にゃあ、と鳴いた。

黒猫、である。

四肢と頭部のバランスが整っており、痩せすぎても太りすぎてもいない、かなり理想的な体型の、スマートな黒猫だ。

黒猫は青い瞳で私を見上げたまま、ぴくぴくと鼻を動かした。鈍い銀色の枷みたいな印象の首輪がされているので、おそらく飼い猫だろう。

飼い主がいるはずだ、と私は周囲を一瞥した。

しかし公園は無人のままだった。少し待ってみたが誰かが現れる気配もない。

私はなんとなく肩を竦め、ベンチに座り直した。
黒猫は私とベンチを交互に眺めてから、ひょいと飛び上がって私の隣に位置取った。
そして、

「――おれを助けてくれ」

と、黒猫が言った。
あまり低くない、やわらかな男の声だ。
私は眉を寄せ、黒猫を見る。黒猫はまっすぐに私を見つめていた。その態度に知性を感じてしまい、私は少しだけ戸惑った。
黒猫の青い瞳――銀目と呼ばれる瞳の奥に、知恵と理性の光があったのだ。
「……なんだって？」
と、私は試しに訊き返してみた。
黒猫は一度だけナァと鳴き、それから、改めてというふうに口を開く。

「だから、おれを助けて欲しいんだ」
間違いない。
猫が喋っている。

ラウンド1／ハードパンチャー

1

「助けてくれ？　助けてくれとはどういう意味だ？　一体何から助ければいい？　そもそもどうして猫が喋る？　名前はまだないのか？」

ベンチにちょこんと座ってこちらを見上げている黒猫に、私は一通りの疑問をぶつけてみた。

端から見れば猫に話し掛ける変なやつだろうが、構わない。猫に話し掛ける変人は別に珍しくないし、そもそも周囲に誰もいないのだから。

「とても一言では説明できない」

黒猫は困ったような口調でそう答えた。喋る際には口を開けているのだが、なんというべきか、口の動きと言葉の聞こえ方が合っていない。下手なアフレコをされたアニメキャラクターのように。

「だったら言葉を重ねて説明すればいい。せっかく喋れるんだからな」

「時間があればそうするんだけど……あのさ、ヤバイやつに追われてるんだよ」

ひどく気まずそうに言う黒猫。

「ヤバイやつ？　ヤバイやつとはどんなやつだ？」

「金髪で、目つきが悪くて、あと態度も悪い。ぶかぶかのジーンズにアロハっぽいシャツ、白のタンクトップ。歳は二十歳よりちょっと上くらい。右耳にボルトとナットみたいな形のピアスを――」

そこまで言ったところで、黒猫はびくりと全身を硬直させた。ほぼ同時に尻尾がアンテナのようにぴんと立ち上がり、黒い毛が逆立ったせいで尻尾が膨れているように見えた。

黒猫の青い瞳が公園のあちら側を向く。

私もつられてそちらに視線を向けた。
そこに――いた。
金髪で、目つきが悪く、両手をぶかぶかのジーンズのポケットに突っ込んだ態度の悪い男。前を全部開いたアロハふうのシャツに白のタンクトップ、右耳にボルト・ナット型のちゃちなピアス。
歳は、二十歳より少し上だろうか。二十五までは行っていない気がする。
どう見ても街のチンピラである。
なのに『街のチンピラ』がそこにいる、という感じはしなかった。三人くらい人を喰った獣がこっちを見て舌舐めずりしている感じがする。
「ようやく見つけたぜ、俺の運命」
と、そいつは言った。負けの込んだギャンブラーが大穴に賭けたときみたいな、破滅を予感させる笑みを顔面に貼り付けて。
「おまえは誰だ」
と、私は言った。男はしかしそれに答えず、私と黒猫を交互に眺めて唇を曲げ、ポケットから右手を出し、握り拳を見せつけるように突き出した。
「……やばい」
黒猫が呟き、何かに備えるように身を屈める。
ぎちぎち――と。
奇妙な音がした。鞣した革を突っ張らせたような。あるいは頑丈な容れ物に砂を詰めて上から強い圧力を掛けたような、力の音だ。
見れば、男の右手が黒く染まっている。
金髪はにたりと笑いながら、速球が自慢の投手さながらに右手を振りかぶり、言った。
「――知らねぇよ」
数歩分、小走りに助走をつける。
振りかぶった拳を、思いっきり振り下ろす。
私は身を強張らせたままの黒猫の首根っこを掴み、その場から飛び跳ねるように離脱する。
半瞬後、木製のベンチが粉砕された。
巨大な鉄槌でも打ち込まれたかのように。

◆◆◆

坂本哲朗は、中途半端なチンピラである。

いつからそうなったかと訊かれたら、物心ついた頃からと答えるだろう。

哲朗にとって他人というものはパワーバランスの上か下にいるものでしかなく、学生の頃はだいたいの他人が下にいると思っていた。何故ならどいつもこいつも哲朗よりも弱かったからだ。

ちょっと小突けば誰もがへらへらと追従の笑みを浮かべたし、そうでないやつは徹底的に潰してやった。世の中ってやつは、なんて簡単なんだ――と、学生の頃はそう思っていた。自分がクズである自覚はあったが、誰かに媚び諂い、誰かの食い物にされるくらいならクズでいいと割り切っていた。

しかし、である。

高校を中退して順調に街のチンピラになり、哲朗はすぐに自分の勘違いを痛感した。

なるほど、確かに世の中はパワーゲームだ。

しかしそのパワーとは単純な暴力を意味しないのだ。社会においてのパワーは、財力や権力だ。

高校中退後、家を出て街でカツアゲを繰り返し、その金で仲間と酒を呑んでクズらしく生きていると、あっという間に「その筋の者」に目をつけられた。最初に仲間の一人が暴行を受け、これに激怒した哲朗は「その筋の者」をぼろくそにしてやった。

なんだ、大人の世界だってやっぱり簡単じゃないか――と、そのときはそう思った。

それからすぐに哲朗は仲間たちから孤立し、暴行事件の犯人として立件され、ごくあっさりと少年院送りになった。「その筋の者」が手を回したのではないか……と、後に少年院で知り合ったひとつ年上のセンパイに教えられた。つまり、「彼ら」には哲朗にない力があったということだ。

入院中はさして何も起こらず、ぼんやりしているうちに三箇月が過ぎ、退院となった。

哲朗が少年院に屈服して、へらへらと追従の笑みを浮かべない限り出られないものだと思っていたのだが――そんなことはなかった。

ごくあっさりと、哲朗は社会復帰した。

しかし帰る場所などなかった。院を出て街に戻ってみれば、契約していた家は引き払われており、仲間だった者たちは哲朗を完全に無視した。これまでなら仲間に舐められたからと暴力を行使していただろうが、哲朗はそうしなかった。

元仲間を殴りつけて従わせたところで、どうせ同じことの繰り返しだと判ってしまったからだ。

――パワーゲームに必要なパワーを、俺は獲得し損ねて生きてきたのだ。

例えば哲朗が中学の頃に笑いながら小突き回して金を巻き上げていた眼鏡の男、あいつは今頃、まともに勉強して大学に行って、もしかすると将来は県議の秘書くらいにはなれるかも知れない。そのときは俺がパワーバランスの下にいることになる。

何なんだ、これは？

俺は一体何を間違えたんだ？

そんなことを考えながら、哲朗は実家のドアを開けようとした。数年ぶりの帰宅だったが、どういうわけか実家のドアには鍵が掛かっていた。

だから哲朗はチャイムを鳴らした。インターフォンで母親が言った。二度と顔を見せるな。親父はどうしたんだ、と哲朗は訊いた。何だかんだで自分に甘かった、小柄で人の好い哲朗の父。無性に父の顔が見たいと思った。

あんたのせいで離婚したのよ、とインターフォン越しに母は言った。冬場に外に放置された鉄板みたいな、恐ろしく冷たい声音で。

――ぎちり、と。

硬く握り締めた拳で、哲朗は実家のドアを殴りつけた。手が壊れようが構わなかった。自業自得でしかない己の憤りをぶつけて自傷したい、そんな思いがあったのかも知れない。

だが、現実に壊れたのはドアの方だった。
殴りつけたドアノブは拉げ、蝶番が応力付加で外れ、ドアそのものが家の中へ吹っ飛んだ。どうしてそんなことになったのか、哲朗には全くわけが判らなかったが、ひとつだけ理解してしまった。
俺はみんなとは違うのだ、と。
母親の悲鳴が聞こえた気がするが、事実を確認することなく、哲朗はその場から逃げ出した。
その後は簡単。
金も居場所もない哲朗にあったものは、結局のところ暴力だけだ。他人とは違いすぎる過剰な暴力。それを使って適当な弱者から金を巻き上げていると、予想通りに「その筋の者」が現れた。
哲朗は、今度は彼らと敵対しなかった。
いわゆる構成員になってしまえば楽だな、と考えていた哲朗だったが、現実はそう甘くなかった。構成員はおろか、準構成員としてすら哲朗は雇用されなかった。暴力しか取り柄のない、しかも自分たちを相手にトラブルを起こした男を採用するほど彼らは間抜けでなかったのだ。リスクマネジメントという概念は堅気の専売特許ではない。
そのかわりというか、仕事を紹介された。法指定の行き届いていない薬物――当時は脱法ドラッグと呼ばれていた――を業者から受け取り、一般人に売り捌くというろくでもない仕事だった。
結局、哲朗はその仕事を受けた。
地元では顔が知られすぎているからと系列会社の伝手だかで御影市へ引っ越した。それから御影市で幅を利かせている組の構成員を紹介され、さらに「業者」を何人か紹介された。卸屋、回収屋、請負屋、などだ。哲朗は卸屋から薬物を受け取り、夜の街の片隅で一般人に薬物を売り捌いた。請負屋からメールが来て指定の場所まで行くこともあったし、裏路地に立っていて一般人の方から声を掛けてくることもあった。イリーガルだがつまらない、そして実にクズらしい、お似合いの仕事だった。

半年に一度くらいは暴力沙汰があり、気付けばそれが哲朗の最大の楽しみになっていた。やんちゃで評判の高校生なんかが末端の売人である哲朗の「手持ち」を狙って襲撃してきたときなどは、自分でもおかしいくらい嬉しくなったものだ。

気付けば二十二歳になっていて、扱う薬物は危険ドラッグと呼ばれるようになった。だからといって売り上げが極端に減ることもなかったし、増えることもなかった。給料をくれる構成員は何回か替わったし、卸屋も請負屋もいつの間にか替わっていたが、哲朗だけは変わらなかった。

世界の端、どうでもいいような場所で、クズを相手にクズがゴミのような車輪をくるくると回している。歯車ですらない、ただの車輪だ。

いつの頃からか哲朗は顔面にへらへらとした軽薄な笑みを貼り付けるようになった。

むっつりと無愛想にしていたときよりは客が増えたが、別に接客に目覚めたわけではない。それはなんというべきか、坂本哲朗が獲得した処世術のようなものだ。社会というよりは世界に対しての。

へらへら笑ってやり過ごさねば、たぶん三日も経たずに神経がどうにかしてしまうだろう。

子供の頃に哲朗が小突き回して屈服させた相手と同じだ。世界に対して、哲朗は負けたのだ。

こんなはずじゃなかった。

だったらどんなはずだったのかと訊かれても、哲朗には答えの持ち合わせなどなかった。

何も考えなければ楽だ。クズがクズを食い物にするためにクズを利用し利用されている。何も考えさえしなければ、酒は呑めるし女も抱ける。どっぷりと薬物にはまった女を適当に食い散らかしてから「その筋」に引き渡したこともあった。派手にやり過ぎさえしなければ捕まることもない。

時折、哲朗は夜中の二時にぎちぎちと音を鳴らしながら拳を握り締め、本当はどんなはずだったのかを考えた。

例えば知らない土地で全く新たな生活をやり直せるとすれば、今度こそはこんなふうにならずに生きられるかも知れない。だけどやはりどんなふうになればいいのかは判らない。

それでも真夜中に拳を握り締めることは止められなかった。まだ何かがあるはず、まだ何かを変えられるはず。だけど、何が？　だけど、何を？

判らないまま、それでも考え続ける。

そんなある日の夜に、出会った。

運命と。

それは黒い猫の形をしていた。

いつものように街の裏路地に立って客を待っていた哲朗の元に、そいつはやって来た。

「あんたは普通の人間じゃないだろ」

黒猫はそんなふうに言った。

自分の頭がとうとうおかしくなったのか、と哲朗は思った。客に売り捌く薬物には一切手を着けていなかったというのに、そんなものがなくとも猫が喋る幻覚を見るだなんて――。

が、どうやら幻覚ではないらしかった。

夜の暗がりで青い瞳を光らせながら、黒猫は淡々とした物言いで告げた。

――自分はある場所にある特定の人間を連れて行くように命令されている。

――あんたをそこに連れて行くのがおれの仕事で、あんたはそこに行けば金がもらえる。

――最低五百万って話だけど、どうする？

じっと自分を見つめる黒猫を眺めながら、哲朗は『黒』とは正反対のモノを脳裏（のうり）に思い浮かべていた。視界の端を走り回る白い兎だ。

それは物心つくかどうかという頃、母親が借りてきたビデオで見た『不思議の国のアリス』のイメージだった。アリスを不思議の国に誘う白兎（ホワイトラビット）の印象が、喋る黒猫と重なったのだ。

そして哲朗は確信する。
——こいつが俺の運命なのだ、と。
ここではない何処かに連れて行ってくれる、何処か知らない場所から来た、よく判らない何か。どんなものより欲していた、変化のきっかけ。
にたぁり、と。
唇の端が吊り上がるのが判った。
しかし哲朗は自分の内心をそこまで深く掘り下げず、猫が喋ったという事実すらあっさり無視して、猫が語った「金」という単語にのみ反応した。
五百万もあれば、どっかに行ってやり直せるはず——そんなふうに思ったのだ。
だからこのとき、哲朗は黒猫の首輪を引っ掴んで自分の顔の高さまで持ち上げ、判りやすい悪党の笑みを浮かべてしまった。
「金って言ったか。話してみろ」
にやにやと笑いながら言った。何かがずれているような気はしたが、こういうふうにする以外にどうすればいいのかは判らなかった。
黒猫はそんな哲朗を青い瞳で見ていた。
そして、あっさり逃げられた。
ちょっと手を離した瞬間、黒猫は猫らしい俊敏さでぱっと駆けて行ったのだ。夜の暗がりに黒が溶け合い、あっという間に見失った。
不思議とショックは受けなかった。
喪失感もなかった。貴重なチャンスを失ったかも知れないという心配すら、哲朗にはなかった。
あったのは、高揚感だ。
追えばいい。
白兎を追い掛けたアリスのように。
仕事のことなど何も考えず、哲朗はポケットの中にたっぷりの薬物を詰め込んだまま夜の街を小走りに徘徊し続けた。午前一時になり、午前二時になり、街から人気が途絶えた後も、探索をやめなかった。
夜通し歩き続けても、黒猫は見つからない。
だけど胸の中に、何かがある。

いつしか街に血が通い始め、人と車の量が増えていく。夜が終わって日が昇り、朝が終わって昼が来ても、哲朗の脳裏に諦念は浮かばない。

絶対にいる。

何故だかその確信があった。

絶対にもう一度、運命に出会える。

だからここで諦めるなんて有り得ない。

午後二時半。

歩き続けた哲朗の進路上に、公園があった。

公園といっても、遊具もなければバスケットコートもない、芝生や木々が申し訳程度に備えられた散歩道のような公園である。何度か取引の現場に指定されたことがあるが、繁華街の中心部に近すぎるので、あまり向いているとは言えない場所だ。

哲朗は作業的に園内へ足を向け、さして期待せずに植え込みの裏などの物陰をチェックしつつ、そのまま公園を通り抜けようとした。こんな場所に黒猫が逃げ込むとは思えなかったからだ。

何の期待もなく歩を進めて、不意に、ごくあっさりと、見つけてしまった。

そう――いたのだ、黒猫が。

公園の真ん中に設置されているベンチ、そこに女が座っており、その隣にあの黒猫がいる。女に前肢を握られていて、非常に距離感が近い。

ひょっとすると、黒猫は哲朗にそうしたように、あの女に話し掛けているのだろうか。

哲朗に気付いたらしく、黒猫がびくりと全身を緊張させた。青い瞳が哲朗を見る。だが哲朗はひとまずその視線を無視し、猫と話をしていたと思しき女の方を観察することにした。

歳は二十代前半だろうか、座っているので正確には判らないが、女にしては身長が高そうだ。手足が長く、ブーツカットのジーンズにボーダーのロングシャツという気の抜けた格好がやたら似合っている。まるで海外の女優のよう――というより、体型があまり日本人的でないのだ。

脱色していない黒髪は肩口あたりまで伸びており、きつめのシャギーが入っている。あるいは大雑把にカットして放っておいてるだけかも知れないが、顔立ちが整っているので妙に雰囲気がある。

一見して、どんな人物なのかさっぱり判らない女だった。普通の勤め人では絶対にないだろう。何処かのビルで事務をしているようには見えない。さりとて接客業というふうでもない。女の雰囲気には愛想がまるでなく、例えばファストフードの店員をやらせたら店の雰囲気がちぐはぐになるだろう。

では、哲朗の「客」になるようなタイプかといえば、これもまた違う。

この世のどんな場所にいても少し浮きそうな、そのくせ当人には浮ついた雰囲気などない——ようするに、よく判らない女だった。

まあ、いい。

どうせやることは変わらない。

そして——できることも変わらない。

哲朗が二十二年と少しの月日を掛けて積み重ねた物事の解決方法は、たったひとつだけ。

にたりと意識的に笑み、哲朗は言った。

「——ようやく見つけたぜ、俺の運命」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。